１　はじめに

今年度は田畑翔太朗君、松山依子さん、吉田菊晃君が入局した。田村准教授は医局長として医局全体のとりまとめだけでなく、ＪＣＯＧ臨床研究、感染対策、基礎実験と縦横無尽の活躍である。西川講師は輸血部業務に加え院内電子カルテの運営に精通し病院運営に貢献している。令和２年度４月から准教授に昇任する。村田助教はこの９月から病棟医長になった。彼が阪大木下研で関わった研究がＪＣＩに掲載された。蒸野助教は平成３１年５月の外来移転を先導した。彼は奈良県御所市西川医院で、末梢血液中の微量な血管内皮細胞を検出する方法を確立している。細井助教は平成３１年３月にシンガポールから帰国した。大里博士の下ＥＢＶ由来蛋白によるＲＵＮＸ３スーパーエンハンサー制御を研究した。９月からは外来医長を務めている。大学院生、学内助教は着実に実力をつけている。海南医療センター、紀南病院、公立那賀病院に当科のスタッフ・内科専攻医を派遣している。若手医師には、二次医療機関において、血液疾患だけでなく内科全般の診療経験を積んでいただきたい。

【臨床】令和２年１月末段階で、外来総数は９４７３名、新患総数は２３４名、入院延べ患者数は１０２０５人、新入院患者数は４３４人、同種造血幹細胞移植件数は１６件である。入院患者数が減少している。臨床講座においては診療あっての研究・教育なので、診療の質・量ともに改善したい。最近、同種造血幹細胞移植が安全に行えるようになったと感じている。同種移植は日進月歩であり多職種連携が重要であるので、新しい知見を職種の垣根を超えて共有するような機会を作り、多くの方に参加してもらいたい。【研究】今年度新たに細井助教と蒸野助教が若手科研費を取得してくれた。「実地臨床から研究へ、研究から実地臨床へ」という心意気をもって研究を行って頂きたい。毎年、英文論文を５報以上パブリッシュしたい。【教育】今年度、血液内科をローテートしてくれた研修医は、岡村雅君、谷河育朗君、渕上真希さん、福島純一君、横矢悠馬君、榊絢朱さん、十三且也君、角南昇吾君、石原朋和君、今地美帆子さん、宮井優さん、西岡照平君、加藤喬君、寺本寛君、中口恵太君、東本菜月さん、谷口元城君、武田里美さんである。今後の糧にして頂きたい。学生教育においては、蒸野助教がベストティーチャー賞を受賞した。

２０２０年３月現在、２０１９年末に中国武漢で流行したコロナウイルス感染症が世界を席巻している。学生時代に「ペスト大流行」（岩波新書、村上陽一郎著）を読み感染症と人間の行動に興味を持った。私が医師になりたてのころにＨＩＶが発生し、新興感染症に対する医療を経験できた。今回のコロナウイルス感染症も社会や医療に大きな影響を与えている。感染者数の推移をみながら早く頭打ちになってほしいと願っている。

最後に、診療を支えて頂いている木村和美師長をはじめとする５西スタッフ・保田裕子師長をはじめとする１１東スタッフ・外来スタッフ・松浪美佐子主任をはじめとする輸血部スタッフ・ＨＣＴＣの上田かやこさん、医局を支えて頂いている矢田尚子さん・花井宏実さん、皆様のおかげさまで教授職を拝命してから５年が経過しました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

令和２年３月
園木　孝志

２　教室現況

（１）教室員

医局	教授	園木　孝志	
	准教授	田村　志宣	
	講師	西川　彰則	
	助教	細井　裕樹	
	助教	蒸野　寿紀	
	助教	村田　祥吾	
	学内助教	大岩　健洋	
	学内助教・大学院生	山下　友佑	
	学内助教	田中　顕	
	学内助教	田畑　翔太朗	
	学内助教	松山　依子	
	学内助教	吉田　菊晃	
	非常勤講師	花岡　伸佳	
	非常勤医師	綿貫　樹里	
	事業担当補助員	花井　宏実	
	秘書	矢田　尚子	
輸血部	主任	松浪　美佐子	
	主査	堀端　容子	
	主査	中島　志保	
	副主査	冨坂　竜矢	
	医療技師	日浦　舞子	
	移植コーディネーター	上田　かやこ	
	研修医	福島　純一	（2019. 3 月～ 4 月）
		横矢　悠馬	（2019. 4 月～ 6 月）
		岡村　雅	（2019. 4 月～ 6 月）
		谷河　育朗	（2019. 4 月～ 6 月）
		渕上　真希	（2019. 4 月～ 6 月）
		榊　絢朱	（2019. 5 月～ 6 月）
		十三　且也	（2019. 7 月）
		角南　昇吾	（2019. 7 月～ 8 月）
		石原　朋和	（2019. 7 月～ 8 月）
		今地　美帆子	（2019. 7 月～ 8 月）
		宮井　優	（2019. 7 月～ 8 月）
		西岡　照平	（2019. 8 月～9 月）

加藤　喬　　（2019. 9 月～10 月）
寺本　寛　　（2019. 9 月～10 月）
中口　恵太　　（2019. 9 月～10 月）
東本　菜月　　（2019.10 月～11 月）
谷口　元城　　（2020. 2 月）
横矢　悠馬　　（2020. 2 月～3 月）
武田　里美　　（2020.3 月）

（２）人事異動

採用

学内助教	森本　将矢	（2019. 4 月　1 日～）
学内助教	田畑　翔太朗	（2019. 4 月　1 日～）
学内助教	松山　依子	（2019. 4 月　1 日～）
学内助教	吉田　菊晃	（2019. 4 月　1 日～）
医療技師	日浦　舞子	（2019. 4 月　1 日～）
学内助教	山下　友佑	（2019. 9 月　1 日～）

退職

学内助教	小浴　秀樹	（～2019. 6 月 30 日）
学内助教	小畑　裕史	（～2019. 8 月 31 日）
学内助教	赤木　佑衣奈	（～2019. 8 月 31 日）
学内助教	森本　将矢	（～2019. 9 月 30 日）
学内助教	田畑　翔太朗	（～2020. 3 月 31 日）
学内助教	松山　依子	（～2020. 3 月 31 日）

（3）業務分担（2019年度）

2019.10月～

1．医局長：田村 （副医局長：西川）	・総務（医局内人事、バイト、慶弔、医局費、医局図書） ・秘書支援（採用と更新と検診、薬説明会、年報、home page、研究費申請） ・研究会（主宰の講演会、学会） ・行事（入局案内、歓送迎会、花見、暑気払、忘年会、医局旅行） ・会議の主導（医局会議） ・救急・集中治療連絡委員　・感染予防対策委員
2．研究主任：田村	・研究室運営（機器や試薬管理など基盤整備と配分、安全指導など） ・研究打ち合わせ、学会予行、研究費やIRB申請の支援 ・試薬管理責任者 ・感染対策マネージャー
3．病棟医長：村田 （副病棟医長：田村）	・病床運営（入・退院、主治医指名、他科交渉） ・管理（回診、学生実習、当直医・日誌、レセプト、臨床試験、剖検） ・検討会（死因検討会）　・リスクマネージャー ・危機管理（医療ミス、事件、感染対策、緊急連絡、災害訓練、投書対応） ・保険請求担当（DPC,入院） ・保険請求担当者会議
4．外来医長：細井 （副外来医長：蒸野）	・診療担当医表、レセプト、外来診療用コンピューターの管理 ・外来の危機管理（苦情、事故、外来診療相談など） ・保険請求担当（外来） ・オーダーリングシステム入力責任者（主）　・移植調整医師 ・予約メンテナンス管理責任者（主）
5．副外来医長：村田	・クリティカルパス運営委員会
6．教育主任：園木	・講義，試験の管理，学生オーガナイザー（4年生）、卒業試験（6年生）、依頼問題作成 ・病棟実習（必修や選択実習、症例選択）の支援（病棟医長と協力） ・臨床実習ディレクター
7．その他 1）園木	・卒後臨床研修センター長（平成28年4月～）　・生涯研修センター長（平成28年4月～） ・更正医療担当　・研究活動活性化委員会 ・腫瘍ｾﾝﾀｰ放射線治療委員会（経理課）　・卒後研修委員 ・ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ部運営委員会（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ部） ・原爆被爆健康管理手当て等認定医 ・身体障害者福祉専門分科会審査部会委員 ・和歌山県エイズ対策推進協議会委員 ・和歌山県立医科大学遺伝子組換え実験安全委員会委員 **病院委員会** 経理課　（科長会、腫瘍ｾﾝﾀｰ運営、腫瘍センター放射線治療、病院機能評価認定更新対策、中央手術部運営、放射線安全） 医事課　（エイズ診療対策、脳死臓器移植対策） 医療安全推進部（医療安全推進、重大事故調査） 感染制御部（感染予防対策、感染制御部運営） 薬剤部　（薬事、薬剤部運営） 輸血部　（輸血療法） ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ部（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ部運営） 卒後臨床研修ｾﾝﾀｰ（卒後臨床研修管理） **医学部委員会** 遺伝子解析研究に関する倫理審査 職業倫理 地域医療支援
2）田村	・副科長 ・がん化学療法プロトコール委員　・移植調整医師 経理課　・和歌山県立医科大学付属病院 薬剤部　（腫瘍センター薬物療法、腫瘍センターがんゲノム医療）　内科専門研修ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ研修委員会委員
3）西川	・電子カルテプロジェクトメンバー ・がん診療拠点病院(相談支援センター業務)担当医　・和歌山県骨髄移植対策協議会委員 ・医療情報部次長　・移植調整医師・委嘱連絡医師 **病院委員会**　・和歌山県献血推進協議会 輸血部　（輸血療法）　・和歌山県合同輸血療法委員 経理課　（医療情報部運営）　・中央手術部運営委員会(代理)
4）村田	経理課　（クリティカルパス運営）　・移植調整医師 経理課　（腫瘍センター化学療法(副)）　・症例検討会(CCﾎﾟｲﾝﾄｺﾒﾝﾄ) 薬剤部　（レジメン審査（副））　・抄読会 ・人権同和研修委員 ・職場研修委員
6）細井	・各科代表者薬事委員　・イメージカンファレンス

３　スケジュール表

（１）医学部生の病棟臨床実習
（２）血液内科診療の医師勤務表
（３）５階西病棟の当直医表（3 月）
（１）－（３）は次ページに収録。

（４）医局行事
１）週間
月曜日　医局会（入・退院、連絡事項)、チャートカンファレンス
火曜日　回診（５階西病棟)、
水曜日　研究打合せ、学会予行、症例検討会、死因検討会、
木曜日　早朝カンファレンス（MGH,CC)、イメージカンファレンス
金曜日　HIV カンファレンス(外来)

２）月間
リサーチカンファレンス
抄読会
移植カンファレンス
診療会議（死因、感染、危機管理、病床運営、投書・広報）

３）年間
歓迎会（4 月)、納涼会（8 月)、科研費申請（9 月）
忘年会（12 月)、年報作成（3 月)、人事（随時）

（1）医学部生の病棟臨床実習

血　液　内　科

集合場所：**研究棟 10 階**　<u>血液内科医局</u>（内線 5453）

総括の後、レポートを訂正し、血液内科医局の秘書机に一部提出すること。

（訂正したレポートを提出しない場合、実習を履修しなかったと判断する。）

☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと☆

日付	8　9　10:30　12:30　13　14　15　16　17～
/（/）月	第１週目（他科） 9：00-レポート進捗状況報告 症例学習 第１週目（他科） 第２週目※症例学習 第２週目 17:00-19:30 ﾁｬｰﾄｶﾝﾌｧﾚﾝｽ 5 西 CR
/（/）火	第１週目（他科） 第２週目 入院患者廻診（園木教授） 第２週目 外来（園木教授） 12：30-薬の説明会 医局 第２週目 第１週目（他科） 症例学習 第２週目 14：00－15：00 造血幹細胞移植（村田助教）5 西 CR ※症例学習
/（/）水	第１週目（他科） 症例学習 第１週目 オリエンテーション（園木教授） 症例学習 第２週目 14:00-15:00 輸血部実習（松浪主任） ※症例学習
/（/）木	第２週目 8:00-8:30 ｶﾝﾌｧﾚｽ（CC/MGH） 外来・内科診察（園木教授） 第１週目 症例学習※ 症例学習 第２週目 14：00－15：00 血球形態を学ぶ（西川講師）5 西 CR 第２週目 16:00-HIV 感染症を把える（園木教授）5 西 CR
/（/）金	症例学習 第１週目 症例学習※ 第２週目 ※症例学習 第２週目 16:00-ﾚﾎﾟｰﾄ発表会/ﾚﾎﾟｰﾄ提出（園木教授）5 西 CR ※ﾚﾎﾟｰﾄは２部、スライド資料は全員分と教官用を準備

教官から指摘を受けた個所を訂正し、必ず本日中に提出すること(代表者１名が取りまとめ提出)

※随時、疾患について討論を行う（園木）

平成 30 年度　　臨床実習　授業評価

（回答者数）　37 人

質問項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	総合	12	13	14	15	16
血液内科学	4.30	4.41	4.41	4.22	4.30	4.24	4.46	4.27	4.32	4.31	4.30	4.32	4.38	4.05	4.03	4.27	4.14
全体平均	3.93	4.09	4.01	3.90	3.93	3.86	4.11	4.03	4.04	4.02	4.04	4.00	4.17	3.82	3.87	3.92	3.98

総合	質問項目1～11の平均
	質問項目1～11の内、最大値
	質問項目1～11の内、最小値

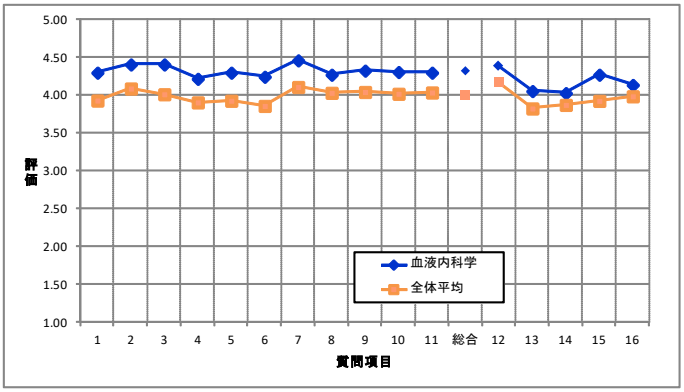
【質問内容】　（まったく思わない①……②……③……④……⑤とても思う）

A　指導医について
1　指導医と討論する時間が充分にあった。
2　親切に接してくれた。
3　問題点を見つけるよう適切に指導してくれた。
4　時間を厳守するよう適切に指導してくれた。
5　実習中の最終目標を明確に示してくれた。
6　毎日の目標を示してくれた。
7　医学的知識について適切に指導してくれた。
8　医学的技能について適切に指導してくれた。
9　知識・技能について誤りがあった場合、注意や指導をしてくれた。

B　セミナーについて（行われなかった場合は記入不要）
10　よく準備された教材を使用してくれた。
11　病態との関連について適切に説明してくれた。

C　自己評価
12　知識が増えた。
13　基本的技能ができるようになった。
14　診断・治療の選択が可能になった。
15　症例の提示（発表）ができるようになった。

D　臨床実習の総合的評価　（悪い①……②……③……④……⑤良い）
16　臨床実習を総合的に評価してください。



(2) 血液内科診療の医師勤務表

2020年1月～

	月	火	水	木	金
外来診察１	田村	園木	田村	園木	園木
診察２	村田	西川	蒸野	村田	西川
診察３	蒸野	大岩		西川	大岩
診察４	山下	田中	村田	細井	田村
処置係	吉田	田畑	田中	田畑	吉田
他病棟当日診察依頼	田中（吉田）	吉田（田畑）	田畑（田中）	田畑（細井）	吉田（田中）
予約外当日外来新患 フォローアップ外来	山下	蒸野	細井	村田	大岩
医局行事	医局会 (15:00～15:30) (入･退院, 連絡等) チャート カンファレンス (17：00～19：00)	病棟回診 (8:30～10:00) 薬の説明会 (2回/月12:30～)	研究打合わせ	MGH(学生実習2週目) (8:00～8:30) 移植カンファレンス (17:00～)毎月月末 イメージカンファレンス (第1・3週) リサーチカンファレンス (第2)17：00～ 症例検討会(研修医のいる月第1・3週)	

(3) 5階西病棟の当直医表

2020年3月

日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
3月1日 田村	3月2日 細井	3月3日 田中	3月4日 吉田	3月5日 大岩	3月6日 山下	3月7日 田中
3月8日 吉田	3月9日 西川	3月10日 大岩	3月11日 田畑	3月12日 山下	3月13日 吉田	3月14日 大岩
3月15日 西川	3月16日 蒸野	3月17日 月山（細井）	3月18日 村田	3月19日 田畑	3月20日 村田	3月21日 山下
3月22日 蒸野	3月23日 大岩	3月24日 田畑	3月25日 吉田	3月26日 田中	3月27日 村田	3月28日 細井
3月29日 田畑	3月30日 山下	3月31日 田中				

4　主な活動内容

(1)　学会および研究会

1)　全国学会

西川彰則：「遠隔バイタルモニターは在宅輸血の安全性を向上するか？」、第 67 回日本輸血・細胞治療学会学術総会、2019.5.23　熊本

栩野祐一、堀　善和、宮本芳行、小山明日美、塩谷千恵子、平康雄大、箕浦直人、蒸野寿紀、田村志宣、中野好夫、園木孝志：「アピキサバン内服中に四肢皮下出血で発症した後天性第 V 因子インヒビター」、第 41 回日本血栓止血学会学術集会、2019.6.20～22　三重

田村志宣、山下友佑、福田友里、小笹俊哉、金澤伸雄、安岡弘直、邊見弘明、大島孝一、改正恒康、園木孝志:「複合免疫不全症を来す新規ＬＩＧ4 症候群モデルマウスは炎症性腸疾患を自然発症する」、日本リンパ網内系学会、2019.6.27-29　島根

西川彰則、坂野紀子、笠原真悟：「在宅輸血患者の重篤な合併症発症検出のための遠隔リアルタイムモニターの課題」、第 23 回日本遠隔医療学会学術大会、2019.10.5-6　岩手

Hiroki Hosoi, Akiko Nambu, Michelle Mok, Takashi Sonoki, Motomi Osato
RUNX3 super-enhancer underlies Epstein-Barr virus mediated cell immortalization.
The 81st Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, 2019.10.11-13, Tokyo

田村志宣、古家美昭、堀　善和、弘井孝幸、山下友佑、大岩健洋、村田祥吾、蒸野寿紀、西川彰則、花岡伸佳、園木孝志：「本学・関連施設における発作性夜間ヘモグロビン尿症に対する eculizumab の使用経験」、第 81 回日本血液学会学術集会　2019.10-11-13　東京

蒸野寿紀、田中　顕、弘井孝幸、堀　善和、大岩健洋、小畑裕史、山下友佑、細井裕樹、村田祥吾、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「悪性リンパ腫再発例に対する救援化学療法 ACES 療法の後方視的解析」、第 81 回日本血液学会学術集会、2019.10.11～13　東京

弘井孝幸、蒸野寿紀、松山依子、田中　顕、小畑裕史、山下友佑、村田祥吾、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「下血を伴った重症腸管急性 GVHD に間葉系幹細胞投与が奏効した慢性骨髄性白血病急性転化の一例」、第 81 回日本血液学会学術集会、2019.10.11～13　東京

田村志宣：「Lig4 遺伝子改変マウスを用いた腸管免疫寛容破綻による炎症性腸疾患の発症解明」、第 47 回日本臨床免疫学会総会、2019.10.17-19　札幌

西川彰則、永橋佑樹、末吉章浩：「B 型肝炎再活性化モニターシステム開発と SS-MIX2 を利用した汎用化の取り組み」、第 39 回医療情報学連合大会、2019.11.21-24 千葉

細井裕樹、赤木佑衣奈、田村志宣、田中　顕、大岩健洋、蒸野寿紀、村田祥吾、西川彰則、園木孝志：「Nivolumab 投与後の同種移植で重症 GVHD を生じたホジキンリンパ腫の一例」、第 42 回日本造血細胞移植学会総会、2020.3.5～7　東京（中止）

蒸野寿紀、田中　顕、弘井孝幸、堀　善和、大岩健洋、山下友佑、細井裕樹、村田祥吾、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「移植後後期腹水症患者における血清 M2BPGi およびオートタキシン」、第 42 回日本造血細胞移植学会、2020.3.5～7　東京（中止）

高木　良、蒸野寿紀、堀　善和、上田かやこ、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「テレビ会議システムを用いた遠隔 LTFU 外来の試み」、第 42 回日本造血細胞移植学会、2020.3.5～7　東京（中止）

2)　地方学会

加藤　喬、赤木佑衣奈、山下友佑、村田祥吾、細井裕樹、蒸野寿紀、西川彰則、田村志宣、園木孝志:「包括的凝固機能検査による周術期止血凝固管理を行った先天性第Ⅶ因子欠乏症の 1 例」、第 111 回近畿血液学地方会、2019.6.29　大阪

岡部友香、弘井孝幸、赤木佑衣奈、小浴秀樹、田中　顕、大岩健洋、村田祥吾、蒸野寿紀、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「未分画ヘパリン投与下に L-Asp を含む寛解導入療法を行った肺血栓塞栓症合併 ALL の一例」、第 111 回近畿血液学地方会、2019.6.29　大阪

榊　絢朱、田中　顕、小浴秀樹、大岩健洋、村田祥吾、細井裕樹、蒸野寿紀、西川彰則、田村志宣、園木孝志:「メトトレキサート大量療法における排泄遅延の危険因子に関する後方視的研究」、第 112 回近畿血液学地方会、2019.11.16　京都

田村志宣、小浴秀樹、堀　善和、森本将矢、蒸野寿紀、西川彰則、園木孝志:「本学・関連施設で診療した肺病変を有する多中心性キャッスルマン病 5 例の臨床的検討」、第 94 回日本呼吸器学会近畿地方会・第 124 回日本結核病学会近畿地方会、2019.11.23　大阪

西岡照平、森本将矢、蒸野寿紀、村田祥吾、細井裕樹、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「inv(16)(p13.1q22)を有する慢性骨髄性白血病・急性転化期の１例」、第 226 回近畿地方会、2019.12.21　大阪

田村志宣、蒸野寿紀、細井裕樹、村田祥吾、西川彰則、園木孝志:「本学における肺 MALT リンパ腫 8 例の臨床的検討」、第 111 回日本肺癌学会関西支部学術集会、2020.2.22　大阪

3)　その他（研究会等）

大岩健洋:「当院における濾胞性リンパ腫に対する初回治療選択」、Meet the Experts in 和歌山、ホテルグランヴィア和歌山　2019.4.12　和歌山

村田祥吾:「慢性骨髄性白血病について」、病薬連携勉強会、和歌山県立医科大学図書館棟研修室 2019.5.29　和歌山

蒸野寿紀:「WHO 分類に基づく造血器腫瘍の診断と治療」、和歌山県臨床検査技師会第 2 回血液研修会、和歌山県立医科大学地域医療支援センター、2019.6.15　和歌山

蒸野寿紀:「移植後後期腹水症患者における血清M2BPGi およびオートタキシン」、和歌山血液学セミナー、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2019.8.1　和歌山

西川彰則:「治療開始から始まる様々なフォロー血液疾患と地域医療　在宅での安全な輸血」、血液疾患～より良い治療とより良い治癒～、ＴＫＰ京都四条烏丸カンファレンスセンター　2019.8.24 京都

田村志宣、山下友佑、折茂貴是、邊見弘明、改正恒康、園木孝志:「新規 LIG4 症候群モデルマウスに発症した炎症性腸疾患の病態解析」、シングルセルゲノミクス研究会 2019、2019.8.29-30　千葉

蒸野寿紀:「濾胞性リンパ腫治療について」、和歌山県血液がんチーム医療ワークショップ、和歌山県民文化会館 6 階特別会議室、2019.9.14　和歌山

田村志宣：「僕を悩ませた肺間質性陰影たち」、一般外来・救急医療で冴える「胸部画像の読影力」、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2019.9.20　和歌山

堀　善和：「Ponatinib で治療した Ph 陽性 ALL 再発の一例」、Hematology seminar in Wakayama～第三世代 TKI を考える～、ホテルアバローム紀の国、2019.9.26　和歌山

蒸野寿紀：「当科における悪性リンパ腫に対する救援化学療法について」、第 9 回紀州血液塾、ダイワロイネットホテル和歌山、2019.11.1　和歌山

西川彰則：「在宅輸血時の遠隔バイタルモニター update」兵庫県輸血医療従事者研修会、2019.11.30 神戸市

西川彰則：「遠隔バイタルモニターによる心拍変動変数を用いた在宅輸血患者の状態観察」、第 47 回和歌山悪性腫瘍研究会、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター　2019.12.14　和歌山

上田かやこ：「テレビ会議システムを用いた遠隔フォローアップ外来の試み」、第 47 回和歌山悪性腫瘍研究会、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター　2019.12.14　和歌山

山下友佑：「小胞体ストレスセンターIRE1αを新規標的とする多発性骨髄腫治療薬の開発」、第 47 回和歌山悪性腫瘍研究会、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター　2019.12.14　和歌山

田村志宣：「血液内科医が関わる院内感染制御」、和歌山真菌感染症セミナー、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2019.12.19　和歌山

蒸野寿紀：「血液内科疾患の診断と治療～紹介のタイミング～」、第 543 回和歌山市医師会内科部会例会、和歌山ビッグ愛 4 階大会議室、2019.12.19　和歌山

園木孝志：「和歌山県における HIV 感染症の現状」、HIV・エイズに関する研修会、南和歌山医療センター、2019.12.21　和歌山

田中顕：「当院での Kd、KR d 療法の使用経験」、多発性骨髄腫セミナーin 和歌山、ダイワロイネットホテル和歌山、2020.1.24　和歌山

蒸野寿紀：「高齢者診療における血液疾患診療」、橋本市民ジェネラリスト勉強会、橋本市民病院 2 階会議室 1、2020.2.6　和歌山

田中顕：「当院における再発 B 細胞性 ALL の治療検討」、第 18 回和歌山造血細胞療法研究会、ホテルグランヴィア和歌山、2020.2.15　和歌山

高木良：「テレビ会議システムを用いた遠隔 LTFU 外来の試み」、2019 年度九州ブロック造血幹細胞移植拠点病院ハイライト研究会、レソラ NTT 夢天神ホール、2020.3.20　福岡（中止）

細井裕樹：「難治性悪性リンパ腫発症における PVT1 の役割解明」、平成 29 年度若手研究支援助成に係る成果発表、2020.3.24 和歌山県立医科大学

(2)　学術論文

1)　和文原著

田村志宣、古家美昭、堀善和、弘井孝幸、山下友佑、大岩健洋、村田祥吾、蒸野寿紀、西川彰則、花岡伸佳、園木孝志：「和歌山県における発作性夜間ヘモグロビン尿症に対する eculizumab 投与例の後方視的検討」　臨床血液 2020 *in press*.

2) 英文原著

Soluble NKG2D Ligands Are Potential Biomarkers and Sentinels of Immune-Mediated Bone Marrow Injury in Bone Marrow Failure Syndromes. Murata S, Mushino T, Hosoi H, Kuriyama K, Nishikawa A, Nagakura S, Horikawa K, Yonemura Y, Nakakuma H, Sonoki T, Hanaoka N. Acta Haematol. 2020;143(1):33-39. doi: 10.1159/000500657. Epub 2019 Jun 19.

Yoshimitsu M, Utsunomiya A, Fuji S, Fujiwara H, Fukuda T, Ogawa H, Takatsuka Y, Ishitsuka K, Yokota A, Okumura H, Ishii K, Nishikawa A, Eto T, Yonezawa A, Miyashita K, Tsukada J, Tanaka J, Atsuta Y, Kato K; ATL Working Group of the Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation : A retrospective analysis of haplo-identical HLA-mismatch hematopoietic transplantation without posttransplantation cyclophosphamide for GVHD prophylaxis in patients with adult T-cell leukemia-lymphoma. Bone Marrow Transplant. 2019 Aug;54(8):1266-1274.

Siddique SM, Kubouchi K, Shinmichi Y, Sawada N, Sugiura R, Itoh Y, Uehara S, Nishimura K, Okamura S, Ohsaki H, Kamoshida S, Yamashita Y, Tamura S, Sonoki T, Matsuoka H, Itoh T, Mukai H. PKN1 kinase-negative knock-in mice develop splenomegaly and leukopenia at advanced age without obvious autoimmune-like phenotypes. Sci Rep. 2019 Sep 27;9(1):13977.

Complement and inflammasome overactivation mediates paroxysmal nocturnal hemoglobinuria with autoinflammation. Höchsmann B, Murakami Y, Osato M, Knaus A, Kawamoto M, Inoue N, Hirata T, Murata S, Anliker M, Eggermann T, Jäger M, Floettmann R, Höllein A, Murase S, Ueda Y, Nishimura JI, Kanakura Y, Kohara N, Schrezenmeier H, Krawitz PM, Kinoshita T. J Clin Invest. 2019 Dec 2;129(12):5123-5136. doi: 10.1172/JCI123501.

Jianbiao Zhou, Jessie Yiying Quah, Yvonne Ng, Jing-Yuan Chooi, Sabrina Hui-Min Toh, Baohong Lin, Tuan Zea Tan, Hiroki Hosoi, Motomi Osato, Qihui Seet, A G Lisa Ooi, Bertil Lindmark, Mark McHale, Wee-Joo Chng
ASLAN003, a Potent Dihydroorotate Dehydrogenase Inhibitor for Differentiation of Acute Myeloid Leukemia, Haematologica, in press

3) 症例報告

弘井孝幸、蒸野寿紀、田中　顕、山下友佑、栗山幸大、村田祥吾、古家美昭、堀　善和、大岩健洋、小畑裕史、細井裕樹、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「腹水濾過濃縮再静注法で症状が緩和した臍帯血移植後後期に発生した難治性腹水症」、臨床血液, 60: 130-133, 2019

Takayuki Hiroi, Toshiki Mushino, Ken Tanaka, Yoshiaki Furuya, Yoshikazu Hori, Takehiro Oiwa, Hiroshi Kobata, Yusuke Yamashita, Hiroki Hosoi, Shogo Murata, Akinori Nishikawa, Shinobu Tamura, Suguru Takeuchi, Masaharu Nohgawa, Taro Yamashita, Yukio Ando, Hiroyuki Hata, Takashi Sonoki : 「AL amyloidosis diagnosed using anti-IGLL5 antibody: a case report」, Amyloid, 26: sup1, 111-112, 2019

Takayuki Hiroi, Toshiki Mushino, Yoshinobu Nakamura, Takashi Sonoki : 「 Acute promyelocytic leukemia presenting with thick and waxy Auer bodies」, 和歌山医学 (J. Wakayama Med. Soc.), 70: 114-116, 2019

Minakata T, Nakano Y, Tamura S, Kazuki Y, Hayakawa K, Hayakawa T, Oota T, Fuzimoto T, Yamano Y, Takii T. Tuberculous Spondylitis Caused by Intravesical Bacillus Calmette-Guerin Therapy. Intern Med. 2020;59(5):733-737.

田村志宣、小浴秀樹、堀善和、森本将矢、蒸野寿紀、園木孝志　トシリズマブ治療を施行した肺病変を有する多中心性キャッスルマン病3例の検討 日呼吸器誌. 2020 *in press*.

Yamashita Y, Hori Y, Kosako H, Oiwa T, Warigaya K, Mushino T, Murata S, Fujimoto M, Nishikawa A, Murata SI, Sonoki T, Tamura S. Brentuximab vedotin for refractory anaplastic lymphoma kinase-negative anaplastic large cell lymphoma in leukemic phase with RUNX3 overexpression. Hematol Rep. 2020 *in press*.

(3)　著書(単行本、シリーズもの含む)

蒸野寿紀、田村志宣:「症例を俯瞰する総合診療医の眼, 口腔内潰瘍で紹介された70歳女性」、 診断と治療, 108: 257-261, 2020

(4)　その他の印刷物(研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

西川彰則:「在宅診療における遠隔モニタリングシステムの利用－在宅輸血療法の安全性向上への取り組み」Precision Medicine 2(7):646-650,2019

西川彰則:「在宅での安全な輸血～赤坂クリニックでの在宅医療～」Newsletter ひろば 2019年12月

蒸野寿紀:「血液内科疾患の診断と治療～紹介のタイミング～」、和歌山市医師会だより, 第664号: 7, 2020

(5)　受賞等

蒸野寿紀：平成30年度和歌山県立医科大学ベストティーチャー賞（臨床部門）　受賞

蒸野寿紀： G-CSF適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループ　システマティックレビューチーム　委員　2019. 2 拝命

蒸野寿紀：日本輸血・細胞治療学会編集委員会出版活動支援小委員会　委員、2019. 7 拝命

細井裕樹：令和元年度和歌山県立医科大学学術論文奨励賞　受賞

(6)　研究費、助成金

園木孝志:厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」

園木孝志：平成31年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）「骨髄異形成症候群の造血障害・遺伝子変異クローン性拡大とNKG2D免疫との関連」

田村志宣：日本血液学会平成31年度研究助成金「原発性免疫不全症における腸管免疫異常の病態形成メカニズムの解明」

西川彰則：令和元年度　血液製剤使用適正化方策調査研究事業（厚生労働省）「小規模医療機関での血液製剤適正使用推進のための輸血時遠隔モニタリングシステムの改良」

細井裕樹：平成 31 年度科学研究費助成事業　若手研究「悪性リンパ腫における非コード RNA PVT1 と PVT1 内 miR の役割解明」

蒸野寿紀：令和元年度科学研究費助成事業「移植後後期腹水症の発症機序の解明および新規診断バイオマーカー開発」

村田祥吾:平成 31 年度科学研究費助成事業「蛋白欠損 GPI によるインフラマソーム活性化:PIGT-PNH の自己炎症機序の解明」

(7)　支援研究会など

Meet the Experts in 和歌山（エーザイ株式会社主催）:「低悪性度リンパ腫の病態と治療」、錦織桃子（京都大学大学院医学研究科血液腫瘍内科学　講師）、ホテルグランヴィア和歌山、2019.4.12　和歌山

和歌山血液疾患カンファレンス（ヤンセンファーマ株式会社主催）:「当院におけるダラザレックスの使用経験」、多田浩平（日本赤十字社大阪赤十字病院血液内科）、ホテルグランヴィア和歌山、2019.5.31　和歌山

和歌山血液疾患カンファレンス（ヤンセンファーマ株式会社主催）:「Ｂ細胞性腫瘍に対する遺伝子異常と分子標的治療」、冨田章裕（藤田医科大学医学部血液内科学　准教授）、ホテルグランヴィア和歌山、2019.5.31　和歌山

Novartis Leukemia Seminar in WAKAYAMA（ノバルティスファーマ株式会社主催）:「造血幹細胞移植推進拠点病院としての取り組みと移植関連の最近の話題」、中前博久（大阪市立大学大学院医学研究科血液腫瘍制御学）、マリーナシティホテル、2019.6.7　和歌山

Novartis Leukemia Seminar in WAKAYAMA（ノバルティスファーマ株式会社主催）:「私の考える慢性骨髄性白血病の治療戦略」、高橋直人（秋田大学大学院医学系研究科血液・腎臓・膠原病内科学講座）、マリーナシティホテル、2019.6.7　和歌山

紀州血液/腫瘍/免疫研究会（ブリストルマイヤーズ株式会社主催）:「Treatment of CML with TKI」、入山規良（日本大学医学部内科学系血液膠原病内科学分野　助教）、ホテルグランヴィア和歌山、2019.6.13　和歌山

紀州血液/腫瘍/免疫研究会（ブリストルマイヤーズ株式会社主催）:「新規作用機序から考察する Elotuzumab のポジショニング」、古川雄祐（自治医科大学　教授/分子病態治療研究センター長）、ホテルグランヴィア和歌山、2019.6.13　和歌山

第 10 回和歌山県立医科大学における漢方医学の会　モダン・カンポウ（株式会社ツムラ主催）:「日常診療に役立つモダン・カンポウ」、新見正則（帝京大学医学部外科学　准教授）、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター大研修室、2019.6.20　和歌山

和歌山血液学セミナー（協和発酵キリン株式会社主催）:「造血幹細胞移植後のウイルス感染症対策」、竹中克斗（愛媛が医学大学院医学系研究科　血液・免疫・感染症内科学　教授）、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2019.8.1　和歌山

一般外来・救急医療で冴える「胸部画像の読影力」（血液内科主催）:「胸部レントゲンの読影のコツ～画像から何を読み取るのか～」、楠本昌彦（国立がん研究センター中央病院　放射線診断科　科長）、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2019.9.20　和歌山

Hematology seminar in Wakayama 第三世代ＴＫＩを考える（大塚製薬株式会社主催）:「Ponatinib で治療した Ph 陽性 ALL 再発の一例」、堀　善和（紀南病院　血液内科)、ホテルアバローム紀の国 2019.9.26　和歌山

Hematology seminar in Wakayama 第三世代ＴＫＩを考える（大塚製薬株式会社主催）:「高齢者再発難治 Ph(+)
ALL に対する治療経験」佐多　弘（りんくう総合医療センター　血液内科医長)、ホテルアバローム紀の国　2019.9.26　和歌山

Hematology seminar in Wakayama 第三世代ＴＫＩを考える（大塚製薬株式会社主催）:「第三世代 TKI の可能性を探る」、松岡　広（神戸大学大学院医学研究科　腫瘍・血液内科学分野　准教授)、ホテルアバローム紀の国　2019.9.26　和歌山

第 9 回紀州血液塾（中外製薬株式会社主催）:「当科における治療関連骨髄異形成症候群の治療について」、阪口　臨（和歌山ろうさい病院)、ダイワロイネットホテル和歌山、2019.11.1　和歌山

第 9 回紀州血液塾（中外製薬株式会社主催）:「濾胞性リンパ腫治療の新展開」、丸山　大（国立がん研究センター中央病院　血液腫瘍科　病棟医長)、ダイワロイネットホテル和歌山、2019.11.1　和歌山

和歌山真菌感染症セミナー（大日本住友製薬株式会社主催）:「免疫不全者における深在性真菌症のマネージメント」、長尾美紀（京都大学大学院医学研究科　臨床病態検査学　教授)、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ　2019.12.19　和歌山

多発性骨髄腫セミナーin 和歌山（小野薬品工業株式会社）:「多発性骨髄腫の治療戦略 Updating2020 ～PI 剤の使用意義～」、石田禎夫（日本赤十字社医療センター血液内科　部長)、ダイワロイネットホテル和歌山、2020.1.24　和歌山

第 18 回和歌山造血細胞療法研究会（アステラス製薬株式会社共催）:「造血細胞移植/細胞治療レジストリとレジストリ研究」、熱田由子（一般社団法人　日本造血細胞移植データセンター　センター長)、ホテルグランヴィア和歌山、2020.2.15　和歌山

(8) 海外出張

該当なし

５　診療実績

（１）	入院	患者総（のべ）数（一時退院後を含む）	435 名
	退院	患者総（のべ）数（一時退院を含む）	446 名
（２）	外来	患者総（のべ）数	9431 名
		新規患者数（病院集計）	232 名

入院患者疾病別分類（入院のみ，重複あり,疑い症例を含む）

		のべ入院数	新規入院数
１）	白血病	108	27
	急性骨髄性		
	M2	35	7
	M4	6	2
	M5	15	1
	M6	4	1
	M7	5	1
	ＡＭＬ－ＭＲＣ	8	3
	ＡＰＬ	3	0
	急性リンパ性(ALL)	13	2
	慢性リンパ性(CLL,SLL,PLL)	5	2
	慢性骨髄性白血病(CML）	14	8
２）	骨髄異形成症候群（MDS）	28	19
３）	多発性骨髄腫（MM）	47	13
４）	リンパ性腫瘍	223	99
	DLBCL	110	52
	FL	25	13
	PTCL	17	4
	HL	5	2
	ATLL	4	1
	AITL	12	3
	IVLBCL	6	4
	ALCL	5	3
	MCL	5	2
	MALT	7	4
	PCNSL	3	3
	BCL	5	2
	LPL	1	1
	PBL	6	0
	T-LBL	5	1
	B-LBL	4	1

		のべ入院数	新規入院数
	HGBCL	1	1
	NK/T 細胞リンパ腫	2	2
５）	血球減少症（造血不全含む）		
	再生不良性貧血（AA）	6	6
	巨赤芽球性貧血	1	1
	発作性夜間ヘモグロビン尿症(PNH)	1	0
	汎血球減少症	1	0
	血小板減少症　(ITP）	7	7
	(TTP)	3	3
６）	溶血疾患		
	自己免疫性溶血性貧血（AIHA）		
７）	その他		
	造血幹細胞移植ドナー入院	12	12
	原発マクログロブリン血症（WM）	16	4
	好中球減少症	2	1
	慢性肉芽腫症	1	1
	セザリー症候群	1	1
	抗リン脂質抗体症候群（APS）	1	1
	DIC	2	2
	HIV	1	0
	POEMS 症候群	1	0
	TAFRO 症候群	1	0
	菊池病	1	1
	本態性血小板血症（ET）	2	2
	血球貪食症候群	1	0
	原発性アミロイドーシス	1	1
	後天性血友病	2	2
	真性多血症	1	1
	白血球増加症	1	1
	白血球減少症	1	1
	原発不明癌	1	1

（３）	造血幹細胞移植(2019.1～12)		
１）	自家移植	19	
２）	血縁	2	
３）	非血縁	24	
（４）	死亡	14	
（５）	剖検（率）	2	（14%）

2019 年 4/1～2020 年 3/31 外来新規患者の疾患名と患者数(疑い症例を含む)

１）	白血病	
	M2	4
	AML-MRC	3
	分類不明	1
	急性リンパ性白血病(ALL)	2
	ヘアリー細胞白血病	1
	慢性骨髄性白血病(CML)	7
	慢性リンパ性白血病(CLL)	2
２）	骨髄異形成症候群（MDS）	36
３）	多発性骨髄腫（MM）	18
	MM 疑い	1
４）	リンパ性腫瘍	
	DLBCL	42
	NHL	1
	FL	13
	ATLL	2
	MALT	9
	PTCL	1
	PCNSL	1
	HL	2
	BCL	1
	LPL	1
	MCL	2
	ALCL	2
	IVLBCL	1
	AITL	1
	バーキットリンパ腫	1
	NK/T 細胞リンパ腫	1
	小リンパ球性リンパ腫	1
	形質芽球性リンパ腫	1
	胃マルトリンパ腫疑い	1
	胃悪性リンパ腫	1
	悪性リンパ腫疑い	3
５）	血小板減少症	19
	ITP	13
	TTP	2
	慢性特発性血小板減少性紫斑病	1
	薬剤性血小板減少症	3

	続発性血小板減少症	2
	血小板単独減少症	1
	二次性血小板減少症	
	血小板増多症	1
６）	貧血	1
	鉄欠乏性貧血	26
	溶血性貧血	3
	再生不良性貧血	3
	巨赤芽球性貧血	4
	正球性貧血	2
	二次性貧血	1
	不応性貧血	1
	大球性貧血	6
	小球性貧血	2
	出血性貧血	1
	腎性貧血	2
７）	多血症	2
	二次性多血症	1
	真性多血症	1
８）	好酸球増多症(HPS)	5
	二次性好酸球増多症	1
	特発性好酸球増多症	1
９）	その他	1
	HIV 感染症	2
	HIV 感染疑い	2
	汎血球減少症	7
	白血球減少症	11
	白血球増多症	6
	薬剤性血球減少	1
	薬剤性好中球減少症	1
	血球貪食症候群	1
	伝染性単核球症	4
	本態性血小板血症(ET)	7
	原発性マクログロブリン血症	2
	後天性血友病	1
	血友病 B	1

ATⅢ欠損症	1
DIC	2
DIC 疑い	1
単クローン性免疫マクログロブリン血症（MGUS）	11
高ガンマグロブリン血症	1
HTLV-1 キャリア	5
アミロイドーシス	3
ATPP 延長	3
単純性紫斑病	1
骨髄炎	1
リンパ節腫大	5
リンパ節腫張	3
リンパ節炎	2
肺門リンパ節腫大	1
腹腔内リンパ節腫脹	2
無症候性リンパ節腫脹	1
骨盤内リンパ節腫大	1
右腋窩リンパ節腫大	1
右鼠径部リンパ節腫脹	1
両側腋窩リンパ節腫大	1
頸部リンパ節腫大	1
組織球性壊死リンパ節炎	2
反応性リンパ節腫大	1
反応性リンパ節炎	1
多発リンパ節腫大	1
肺炎	1
肺線癌	1
非小細胞肺癌	1
胃癌	1
子宮癌	1
転移性線癌	1
脾腫　脾臓肉腫瘤	1
転移性扁平上皮癌	1
下眼瞼扁平癌	1
Ｂ型慢性肝炎	2
前立腺癌	2
急性肝障害	1
急性腎盂腎炎	1
急性肝炎	1
気管支喘息	2

膠原病疑い	1
菊池病	1
菊池病疑い	1
梅毒疑い	1
OIIA-LPD 疑い	1
ICUS	1
サルコイドーシス	2
第 7 因子欠乏症	1
縦隔腫瘤	1
シェーグレン症候群	1
IGg 関連疾患	1
EB ウイルス伝染性単核症	2
異常蛋白血症	1
遺伝性球状赤血球症	1
sIL-2R 高値	2
WBC　PLT 高値	1
フォンウィルブランド病	1
M タンパク血症	1
胸痛	1
狭心症	1
赤芽球ろう疑い	1
メントキセート関連リンパ増殖性疾患	1
抗リン脂質抗体症候群疑い	1
プロテイン S 欠乏症疑い	1
下肢出血斑	1
全身性紅皮症	1
肩関節痛	1
下肢血栓性静脈炎疑い	1
不明熱	2

６　リーダーレポート

「　１年間の振り返りとこれからについて　」

副科長・医局長・研究主任　田村　志宣

年報依頼がありました 3 月下旬、コロナ騒ぎの中、自宅のリビングで（激動？）1 年間を振り返りました。

医局として最も大きな出来事は、やはり日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）のリンパ腫グループ（LSG）に 2019 年 7 月から参加させて頂いたことだと考えています。和歌山県から JCOG の施設参加を考えたのは、もう 7〜8 年前に遡ります。その頃は、血液関連の各種学会・研究会・セミナーなどに参加すると、少しとり残された感がありました（自分が知識不足だっただけかもしれませんが）。全国の名だたる施設と協力し、大きな臨床試験を作り出し、一つの標準治療を作り出す事は、並大抵ではありません。やはり、既存の大きな研究グループに参加する事で、最新情報を共有し、自分達の診療において何が不足し、何がこれから必要であるか、予見できると考えていました。そして、和歌山県の血液疾患の診療に少しでも還元できればと考えていました。2019 年 7 月から JCOG-LSG の班会議に参加となりましたが、班会議では、日本の血液医療を向上するため、全国 50 の専門施設が切磋琢磨している姿が強く感じ取れました。当科が少しでも JCOG-LSG に貢献し、食い込んでいくためには、症例登録だけでなく、クオリティーの高いアイデアを出し、信頼を勝ち取る必要があると感じていました。そのためには、プロトコール作成の議論が行われる小委員会に参加する必要があると感じました。幸運にも、JCOG-LSG 内で新しい小委員会の募集がありましたので、僕は、“高齢者ホジキンリンパ腫”、蒸野先生は、“末梢性 T 細胞リンパ腫”のメンバーに立候補し、それぞれに参加することができました。和歌山医大血液内科の存在感を国内外に示していくための一歩を踏み出したと思っています。道のりはまだまだ長いですが、新しい多施設臨床試験や医師主導治験など、和歌山医大血液内科が事務局としてできるようになればと志高く持っています。まずは、いろんなお仕事のお鉢が回ってくるような環境づくりに頑張りたいと思います。

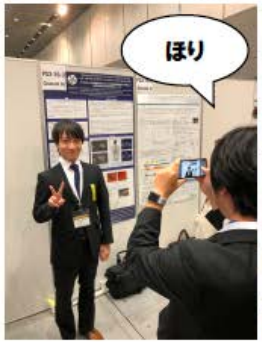
昨年度は、大変嬉しかった事が二つあります。一つ目は、やはり入局者が 4 人であった事です。岡部先生・榊先生・武田(福井)先生・横矢先生の 4 人の非常に優秀な先生達が入局してくれました。この数年、複数人の入局者がいて、関連病院も複数名派遣する事ができるようになり、充実してきました。将来的には、内科専攻研修医プログラムでは、総合・地域診療を拠点病院で研修して頂き、その後、大学で移植医療や基礎・臨床研究（大学院取得）などを行って頂き、そして、ナショナルセンターや海外の有名なラボへ留学し、また大学へ戻ってきて、和歌山医大で教育・研究・医療に貢献してもらうというサイクルが必要だと思っています。血液内科医局は、ハブ空港のような拠点になればと考えています。そして、血液専門医の研修施設として、紀南病院含めた関連病院で専門研修認定施設の認可が得られるように整備していきたいと思っています。そのためには、 要件を充足するために、医局員にはできる限り血液内

科指導医取得まで頑張って欲しいと思っています。内科専攻研修医プログラムの研修施設として、那賀病院と橋本市民病院との協力体制が出来つつありますが、紀北地方の血液内科医療の向上を目的とした人材派遣も必要に迫られているのも実感しています。紀北・紀南とバランスよく俯瞰的に整備してきたいと思います。

二つ目に嬉しかった事は、“悪性リンパ腫治療マニュアル（改訂第 5 版）”の執筆依頼があった事でした。“悪性リンパ腫治療マニュアル”は、10 年前に国立がん研究センターの短期レジデントの時代に、改訂第 3 版を参考にして研修しました。実は、改訂第 3 版を当時科長であった飛内賢正先生から贈呈して頂きました（当時, ものすごく感動しました）。今回、いわゆるバイブル的な教科書の改訂版に、自分が携わる事が出来たのは、本当に嬉しく思いました。与えられた章は、「合併症・臓器機能障害を有する悪性リンパ腫」でした。おそらく、総合的な診療を行っているから、この章の依頼が来たのではないかと考えています（実際はわからないですが、本当にそうならば、身に余る光栄です）。実際、総合診療的なお話なので、資料集めからいろいろ大変でした（蒸野先生には本当にお世話になりました）。当初の執筆依頼では、第 4 版と全く異なる内容を要求されていましたので、かなり悩みました。そして、執筆を開始すると、自分の知らない事が多く、本当に反省しました。“成人がんサバイバーにおける心不全の予防”についての新しいガイドラインが、2017 年に米国臨床腫瘍学会から提言されていました。そのための学会なども存在します。乳がんの分野では、かなり詳細に記述はありますが、悪性リンパ腫の記載・報告はあまりありません。乳がんの報告から考えると、通常の CHOP 療法を 6 コース行うだけで、心毒性がかなり残るレベルとなります。治療が先進になるにつれて、担がん患者の長期生存（サバイバー）が増加してきています。悪性リンパ腫の治療期間だけでなく、治療以降の臓器障害・生活の質・生活環境などにも目を向けてあげる必要があるのではないかと考えています。そういう意味では、総合診療的かつ全人的な姿勢で、患者さんと向き合うことを心がける必要がありますし、若い先生には特に学んで欲しいと思っています。そして、指導医の先生には, そのような姿勢で指導してあげて欲しいと思います。

2020 年 3 月の時点で、基礎研究については、血液内科のラボから original article をそろそろ出せる体制になってきました。血液内科だけでは難しい実験ももちろんありますので、そこは学内外の研究室とコラボするカタチでまとめることができるようになりました。クオリティーの高い内容で学会発表・論文発表を行い、それが継続できる体制づくりに励みたいと思っています（ある程度はできつつあると思っていますが、、、）。今後の目標は、“和歌山医大から新知見を海外に発信”です。もっとわかりやすく言うと、“あっ！和歌山医大の血液内科、すげっ！”と言わせたいですね。

最後になりましたが、ある程度厳しさは必要ですが、アットホームな医局づくりを引き続き行っていきたいと思います。本当にいい雰囲気の医局だと思っています（今までも良かったですよ、さらにという意味です）。医局員の先生たち、引き続きご協力のほど宜しくお願い致します。



2019年度に僕のスマホで撮影した思い出の写真

榊先生，ごめんなさい，汗．
僕のスマホの中に先生の写真がなかった．

新年度の抱負

西川　彰則

COVID-19が猛威を振るう昨今、これまでの社会が築いてきた社会基盤の脆弱な点が浮き彫りになってきていることを感じます。情報化社会になったが故の風評被害、一部の偏った意見が流布されるといった状況を鑑み、社会の情報リテラシーの向上が、これから我々が目指すところだと考えます。

さて血液内科医局に目を移すと、昨年10月で病棟医長を村田先生に引き継いで頂きましたが、コロナ疑い患者の隔離など病棟運営面で気を遣うこともあり大変だと思いますが、随分尽力頂き感謝しております。交代したばかりで慣れないこともあったかと思いますが、そつなく運営しているのは流石だなと思います。外来移転を無事完了させた蒸野先生から外来医長は、細井先生に交代し、和歌山県立医大生え抜きの先生達が、血液内科を引っ張っていく時代になったんだなあと頼もしい限りです。新年度には、横矢先生、武田先生、榊先生、岡部先生の4名が入局予定で医局の机が足らなくなるぐらいに仲間が増えてきました。その分我々の責任は重大で、臨床、研究を通じて彼らに道を示してあげる必要があります。そのためには指導者側の研鑽も必要で、更に新入局者だけでなく若い先生方のキャリアアップの選択肢を広げていかなければなりません。まだまだ我々の医局は、全国の血液内科の中ではこれからステップアップする段階にありますので、他の研究機関や専門の先生、多施設共同研究などの情報とリンクし、その中で我々オリジナルを徐々に確立していくのがいいのかなと考えています。幸い、田村先生、蒸野先生のお陰でJCOGに入ることもできました。こういった取り組みを進めながら、和医大ここにありという流れを作っていき、それに若手が続くという循環をつくっていければと思います。

私事では、4月から医療情報部の仕事に従事する割合が増え、血液内科医局を支える割合が減ってしまうことになり寂しくもありますが、これまで同様に仲間として扱ってくれると幸いです。新年度は、電子カルテ第5期システムの準備がさらに佳境に入ってきます。他部門とのやり取りもこれまで以上に増えてきますが、現場での問題点を集約することで新しい課題やアイデアも得られる良い機会だと考えています。やはりここでも情報です。大きな社会でも、病院でも医局でも正しい情報共有は、大きな武器になります。

新年度の私の抱負は、第5期電子カルテシステムを現場のニーズをくみ取りながら使い易いものにすべく検討すること、現在企業と開発中のアプリケーションのリリース、青洲リンクの普及、人工知能と医療情報を用いた新たな価値の創出を目指した研究を進めたいと考えています。

そして、血液内科医局それぞれのメンバーのビジョンとミッションを明確にできるお手伝いができればと考える次第です。

2019 年度を振り返って

助教・外来医長　細井　裕樹

2019 年度はシンガポールから帰国し、再び診療に関わりました。年度の後半は外来医長も担当しました。今年度の外来での大きな変化としては、外来移転したことでした。診察室は以前の 2 診体制から 4 診体制となり、外来処置室も大幅に拡充されました。外来移転後の診療が安定するまでは前外来医長の蒸野寿紀先生が行ってくれましたが、診察室の配置の設計から実際の移転準備までかなりの苦労があったことと思います。外来スペースが大きくなったことで、学内助教の先生方にも外来診療を行って頂くことができるようになりましたし、処置枠の融通もききやすくなりました。今後は外来運用の細かいところを調整していき、患者さんが利用しやすく、また外来主治医の先生が利用しやすいような外来運用を行っていきたいと思います。外来看護師のみでなくクラークの松林さんの役割も大きく、看護師とクラークさんからの意見は外来運営を行っていく上で非常に重要になっています。

病棟業務に関しては久しぶりで新しい治療方針や薬剤があり、勉強することも多かったです。赤木先生、松山先生、田畑先生と診療にあたりました。私が後期研修医のときと比較すると、みな勉強熱心で優秀でした。病棟の診療システムが確立してきたことと、入局者が毎年いることで屋根瓦式の指導がいきわたっていることも後期研修医の指導にいい方向へ働いていると思いました。また、多くの初期研修医がローテートしてくれ、血液診療に興味をもってくれたものと思います。初期研修医にもできるだけ同種移植治療に携わってもらいました。さらに今年度は蒸野先生がベストティーチャー賞を受賞しており、学生からも認められていることが分かります。今後も学生、初期研修医に血液内科の魅力を伝えられればと思います。

研究に関しては、シンガポールで勉強した実験手技を用いて留学前に残していた課題を進めました。ただ、臨床をしながらの基礎研究は思ったように進まず、シンガポールの研究環境が非常に恵まれていたと改めて感じさせられました。また、実験に行き詰まったときは周りの研究者にアドバイスをもらっていたのも実験をおし進める上で重要な要素であったと再認識させられました。現在は大学院生の山下先生にもヒントをもらいながら実験を進めていますが、できれば時間をつくって新たな実験手技にも手を出していきたいと思っています。難治性悪性リンパ腫の患者さんから樹立した細胞株を用いて染色体転座点に着目した研究を行ってきましたが、来年度も少しずつ進めて形にしたいと考えています。

年報に寄せて～2019 年度を振り返る～

助教　蒸野　寿紀

外来移転・外来診療について

2019 年 5 月 20 日に新外来が稼働しました。診察室 4 室・予診室 2 室・点滴ベッド 6 台と、診療スペースも十分確保でき、真新しい外来スペースで気持ちも新たにスタートしました。無事稼働できるか不安もありましたが、皆様方のご協力によりスムーズに稼働できたことを感謝しております。今後、中待合のスペース確保などが未解決の問題として残っていますが、着実に解決していきたいと思います。

2019 年の外来患者数は 9,437 名に達しました。院内紹介を含め、502 例の新患患者を診療しました。このうち、悪性リンパ腫（疑いを含む）が 150 例、30%と最も多くを占めました。このような外来統計の充実、入院統計との連携も今後の課題と考えています。

今年度は、地域医療支援センターの遠隔外来システムを利用して、紀南病院でフォロー中の同種移植後患者の LTFU 外来を、遠隔 LTFU 外来として整備しました。この取り組みについて、HCTC 上田さんに和歌山悪性腫瘍研究会で発表して頂きました。また、日本造血細胞移植学会に看護師高木さんに演題登録してもらったところ、九州大学より講演依頼を受けました（COVID-19 で発表は中止）。遠隔 LTFU 外来整備により、和歌山から新たな情報を発信することを目標にやってきましたが、このような形で評価を受け、今後さらに発展させていくモチベーションにつながりました。

外来移転の仕事がひと段落しましたので、2019 年 10 月より細井先生に外来医長を交代しました。今後は残された課題について、細井先生と協力して解決していきたいと思います。

臨床

病棟は大岩先生・田畑先生とチームで診療しました。谷河先生、角南先生、中口先生、谷口先生と 4 名の優秀な初期研修医の先生方がローテートしてくれ、チームに活気を与えてくれました。自分自身が直接病棟業務をする機会は減りましたが、新規レジメンの採用を積極的に行うなど、治療の標準化に努めました。現在の日本では海外とのドラッグ・ラグがなくなりつつあるため、治療のアップデートが欠かせないと感じています。その一環として、従来行ってきた悪性リンパ腫に対する救援化学療法である ACES 療法について後方視的解析を行い、日本血液学会で発表しました（台風で発表は中止）。結果、治療抵抗性症例では ACES 療法の効果が乏しいことが判明しました。このような後方視的解析を若い先生方に手伝ってもらい、診療内容をアップデートすることも今後の課題と考えています。

研究

2019 年度は科研費を取得できました。同種移植後後期腹水症に関するもので、これまで研究を温めて来られた細井先生・園木教授のおかげと感謝しています。また、2019 年 1 月よりフローサイトメトリーを用いた血管内皮細胞検出の研究を行っており、今後は臨床検体に応用していきたいと考えています。

2019 年 7 月よりは、日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）リンパ腫グループに参加しました。既に 3 例の症例を登録しましたが、症例登録で貢献するだけでなく、JCOG 試験に主体的に関わる必要性を感じ、PTCL/ATL 小委員会に委員として参加することにしました。国立がん研究センターに留学されている堀先生が、和歌山医大で JCOG 試験の研究事務局を担える日を夢見て、足掛かりにしたいと考えています。

その他、日本輸血・細胞治療学会出版活動支援小委員会、G-CSF 適正使用ガイドラインワーキンググループで、全国の熱意ある先生方と一緒に仕事をさせて頂く機会に恵まれたのも得難い経験となりました。

教育

2018 年度和歌山県立医科大学ベストティーチャー賞（臨床部門）を受賞しました。学生からの評価を得られたことを大変嬉しく思っています。しかし、教員評価では 5 段階の 2 と評価されたので、さらなる教育への貢献が今後の課題と考えています。また、2019 年 6 月に日本内科学会 JMECC ディレクターに認定されました。和歌山医大のディレクターは田村先生と私のみで、血液内科は JMECC 開催運営に重要な役割を果たしています。今後、ディレクターとしてインストラクター養成、他院でのコース開催に貢献したいと考えています。さらに、今年度は日本血液学会指導医、日本造血細胞移植学会認定医、日本輸血・細胞治療学会認定医を取得できましたので、今後若手の指導に活かしたいと考えています。

Time goes around

助教・病棟医長　村田　祥吾

平成から令和へと時代が変わった。昭和、平成、令和と三つ目の時代を生きている。オリンピックイヤーとして明るく、活気あふれる一年を期待していた矢先に新型コロナウイルスのパンデミックで落ち着きのない日々が続いている。新型コロナウイルスの蔓延のために多くの学会やイベントが中止となり、ついには東京オリンピックまでも延期となった。志村けんがコロナウイルスによる肺炎で亡くなるという訃報まで飛び込んできた。毎日のニュースは新型コロナウイルスでもちっきりである。2020年という節目の年は私の前厄の年でもあるが、ここまでの3ヶ月間は暗い話題が目立つ。

血液内科としては今年度3人の入局者があり、4月からは新たに4人の仲間が加わることになった。ありがたいことにここ数年は毎年複数の入局者が確保できている。私が血液内科に入局した頃にはこれほどまでに医局員が増えることなど想像もできなかった。実際に現医局員では私の5学年下まで初期研修修了後の入局者はなかった。「あんな時代もあったねと　いつか笑って話せるわ」(「時代」中島みゆきより)。今ではとても忙しく大変であった当時のことが笑って話せる経験となっている。ここ数年で医師の働き方が大きく変わったことも入局者の増加につながっているだろう。私が入局した当時は休日も毎日病院に来るのが当たり前で、まして私的な理由で年休を取ることなど考えられなかった。ちょうど入局した年度の1月に次男が妻の実家で生まれたが、初めてわが子の顔を見たのは生まれて一週間が経ってからであった。今では土日、祝日はなるべく休み、年休も使い切るような働き方が求められている。所謂「働き方改革」である。無論働き方改革を否定するつもりは全くない。実際に、昔のように日付が変わるまで働き、土日も遅くまで居残りし、ビリーズブートキャンプと揶揄されるように痩せていく研修医がいなくなったことが、血液内科へのイメージを大きく変えたことは事実である。ただ、若い世代のそういう働き方を少し寂しいと感じてしまうのは私が昭和の人間だからだろうか...。「24時間戦えますか？」(リゲイン® CMより) もはやパワハラとして非難されてしまう。

今年度は10月から病棟医長を引き継いだ。責任ある仕事ではあるが、多方面に気を遣うことの多い中間管理職である。円滑な病棟運営をし、若い先生達の成長をサポートしていくのが私の役目である。まだ半年しか経っておらず、不十分な点も多いが、ようやく仕事にも慣れてきた。安定した入院患者の確保、ソフト面・ハード面の充実、医師とコメディカルとの良好な関係性の維持等、やるべき仕事はいくらでもある。歴代の病棟医長は皆立派な先生方であり、私など到底足元にも及んでいないが、自分なりの個性を活かしつつ、より良い病棟運営ならびに人材育成に携っていけたらと思う。

1月に次男の2分の1成人式が小学校であった。私は今年2回目の成人式を迎える。この20年間は本当にあっという間であった。日々の仕事に追われて無駄に歳ばかりとってきたようで時々むなしくもなる。「ある日突然考えた　どうしてオレは頑張ってるんだろう　家族のため　自分のため　答えは風の中」(「明日があるさ」ウルフルズより)。大学入学時に流行っていた曲だ。歌詞が身に染みる歳になったものだ。

2019年度を振り返って

輸血部　主任　松浪美佐子

今年も、リーダーレポートの文章を…と連絡を頂き、何を書くかなかなか考えがまとまらないため、とりあえず今までの年報を読み返してみました（今年で17冊目になるようです！）。この年はシステム移行のことで忙しかったんだなあとか、この年は新しい機械の導入があったんだなとか、先生方や輸血部スタッフの懐かしい顔や思い出を振り返ったり、世間の時代の流れみたいなものも感じたり、ずっと変わらない緑の表紙の年報をせっせと作ってくれている秘書さんの姿を想像したりして.....。やっぱりなかなか考えはまとまらないのですが、2019年度を振り返ってみたいと思います。

昨年度1年間の血液製剤（RBC、PC、FFP）の購入金額は、3億8千万でした。そのうち、廃棄処分したのは120万円分でした。割合からいうと0.3%ですが、貴重な善意の献血による血液製剤のため廃棄処分0%を目標としています。廃棄処分になる理由は、以前は不要又は過剰オーダーによるもの（PCを依頼したが、予想以上に血小板数が多かったため使用せず期限切れとなった）、連絡不足（キャンセルの連絡を忘れていた）などが多数ありました。最近では適切な場所・温度での製剤保管ができていなために廃棄処分となるケースが多いように思います。輸血部管理の冷蔵庫がない一般病棟やカテ室に30分以上製剤を放置したり、溶解したFFPを冷蔵庫ではなく再び冷凍庫に入れてしまった例などがありました。製剤を受け渡しする際に、保管についてその都度注意を促したり、各事例を輸血療法員会で報告をしています。今年度の廃棄金額は123万円となりそうです。消費増税の影響もありますが、前年度より増加しました。0%にするには難しいですが、少しでも減らせるよう今後も努力していきます。

また、長年の課題であるFFPの使用量削減についてですが、使用量が多い診療科への内容確認や、適正使用加算を取得している大学病院へ状況や対応策のアンケート調査を実施するなど解決策を模索中です。園木教授には輸血療法員会を通して繰り返し使用量削減を呼び掛けて頂き、大変感謝しております。引き続きご指導よろしくお願い致します。

振り返ってみると、成果があった！と声を大きくして言えるようなことはあまりなかった1年でした。ですが、職員の入れ替わりもある中で、大きなミスなく過ごせたことに安堵しています。今後も、輸血製剤の適正使用の推進、安全な輸血の提供に努力していきたいと思っています。そして、現在新型コロナウィルス感染の影響で、イベントの自粛やオリンピックの延期など暗いニュースが多いのですが、また来年の今頃に年報を読み返した時には、そんなこともあったなあと笑えるくらい、明るい毎日になっていることを願いながら、リーダーレポートを終わらせて頂きたいと思います。

☆5階西病棟　ファイト！☆

5階西病棟　木村和美

今年もあっという間に過ぎた。年を追うごとに月日の流れが速くなるといいますが、「光陰矢の如し」・・・もう少し大事に過ごすべきであったと反省・・・

1年間いろいろありました。4月には5人の新人看護師が入職、今年は個性派ぞろいで、私の頭は？？？がいっぱい、それは新人看護師にとっても同じ、お互い様です。残念ながら新人看護師は現在4人になりましたが、先輩の愛情いっぱいの指導とやさしい愛のムチにより、ずいぶん成長しました。2年目、3年目が楽しみです。

2年目、3年目看護師は異動することなく、次年度を迎えられます。毎年、育てた2年目、3年目看護師を他部署に送り出してきましたが、やっと「積み重ね」ができそうです。血液内科は、専門性の高い診療科です。広く深く勉強し知識を増やし、実践に活かしてほしいと思います。

先輩看護師も頑張りました。血液内科での看護研究ができなかったのは残念ですが、事例をまとめたり、事例カンファレンスをしたり、患者さんのことを考える機会をたくさん作ることができました。LTFU研修にも2人が参加し修了することができました。LTFU研修は今年度から事前のｅラーニングが必須となり、かなり勉強してくれました。自信にもなったようです。LTFU外来が充実してくれればと思います。西川先生の移植学習会は今年も定期的に開催され、移植に関する知識を深めています。今後の移植看護に活かしてくれることを願ってやみません。

私は、今年で3年間の5階西でのお勤めを終了させていただきます。

この3年間は、私の長～い看護師経験の中でもそう体験できないことが毎年のように起こりました。これは、私の管理能力不足によるものなのか、たまたまなのかわかりませんが、どちらにしてもよく持ちこたえられたと思います。これも、先生方、一緒に働いてくれるスタッフの皆さまのおかげだと心から感謝しています。

今後もいろんなことが起こると思いますが、元気に笑顔で乗り切りましょう！

みなさま、ありがとうございました。

2019年度を振り返って

11階東病棟　保田　裕子

今年も年報を作成することになりました。11階東病棟にきて、年報作成を初めて体験しました。今まではなんとなく1年が過ぎていっていたのだと思って日頃の評価の甘さを実感しています。

さて、今年の1年を振り返ってみますと、まずは、平成から令和という新たな時代になりました。それに伴ってかも知りませんが、11階東ではおめでたいことがたくさんありました。3人のスタッフが結婚し、3人の家庭で出産がありました。うち2人の男性看護師さんが結婚し、パパになりました。

病棟では、相変わらず内視鏡など多数の出棟件数や緊急入院による煩雑な業務が続いていますが、看護部や病棟の目標である安全で質の高い看護を実践するという目標に向かって安全な治療や終末期における患者さんに対しても寄り添いたいという気持ちをもっています。しかし、忙しすぎてゆっくり関われない・考える余裕がないというジレンマも抱えています。

そのような中でも、質の向上に向けて、学習会なども今年度は積極的に取り組みました。急変の少ない病棟のため、知識はあっても実際に行動に移すことができないなど不安を抱いているため、今年度は医師に協力を求めてシミュレーションも交えた学習会を開催しました。医師とともに実施することで刺激をうけ、よりアセスメントも深まることになり学びが大きかったです。

これからも患者さんだけでなく働きやすい職場環境を整えられるようにしていきたいと思っていますので、ご協力をお願いします。

田中　裕月

2019 年度を振り返ると、平成から令和という新しい元号へ変わり、おめでたい雰囲気につつまれてスタートしたことが印象的に思い出されます。しかし、ここ数ヶ月は新型コロナウイルスによる悲しいニュースが続いており、早く感染がコントロールされ収束に向かうことを願うばかりです。

悲しいニュースが続く中、薬剤師にとっては少しうれしい出来事がありました。この 4 月から「アンサングシンデレラ」という病院薬剤師が主役のドラマの放送が決定したことです。医療ドラマは沢山ある中、薬剤師が登場するドラマはほとんどありません。薬剤師にスポットを当ててもらったこのドラマに薬剤部では大注目しています。ドラマのタイトルにもあるアンサングとは“歌われない、縁の下の力持ち”といったような意味合いです。実際、薬剤師の仕事はマイナスをゼロにすることだと言われることが多いです。ドラマの前評判でも地味な設定と書かれてしまいましたが、ネガティブな意味ではなく、医療に携わる一員として、患者さんへのマイナスをゼロにすることも大切な仕事だと自負しています。

今年度、薬剤部が新しく始めた「外来持参薬確認業務」も、まさにマイナスをゼロにする業務です。手術を予定した外来患者さんの持参薬を確認し、その中にある術前中止薬を把握、中止指示が漏れていないか、中止期間は適切かを確認することで、それらによる手術の延期が起こらないようにすることが目的です。すでに何件かの中止指示漏れを防いでいます。

そんな中、最近はゼロからプラスを生み出せる薬剤師の仕事も増えてきました。その一つが、病棟担当薬剤師が行っている薬剤管理指導業務や病棟薬剤業務です。昨年も紹介しましたが、「薬剤管理指導業務」は患者さんやご家族に直接説明を行い、服薬方法などの薬剤説明、薬で困っていることはないか、副作用はないかという確認を行っています。もうひとつの「病棟薬剤業務」は、全ての入院患者さんの持参薬確認や服薬状況の確認、投薬、注射状況の把握、相互作用確認、ハイリスク薬の患者指導、TDM などが対象業務となります。病棟薬剤業務は週 20 時間行うことが定められています。服薬アドヒアランスの向上や治療が円滑に進むようにサポートできていればいいなと思い日々業務に励んでいます。病棟で実際に患者さんとコミュニケーションをとりながら、患者さんの体調や性格に合わせた服薬方法を提案することは、非常にやりがいがありました。

最後に、5 西病棟の非常に質の高い医療を提供している皆様のチームの一員としてこの 1 年間過ごせたことは、私にとって学ぶことが多く、非常に貴重な時間でした。先生方、看護師さん、スタッフの皆様にはいつもご協力・ご支援いただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。今後の皆様の更なるご発展とご活躍を心からお祈り申し上げます。

7　寄稿文

当科における２０１９年度を振り返って

和歌山ろうさい病院　血液内科 阪口　臨

今年度も、研修医のローテートや、医学生の実習に見学などを、可能な限りで受け入れました。私が日頃行なっている仕事を、そばで見てもらうことくらいしかできておらず、いつも、申し訳ない気持ちでいっぱいです。“おやじの背中”ではありますが、私の背中を見て、何かを感じ取ってもらえていることを願っている次第です。

また、毎週水曜日の午後で、病棟スタッフと入院患者のカンファレンスを、定期的に行なうようになりました。最近は、看護スタッフだけでなく、薬剤師や MSW なども積極的に参加いただけるようになりました。時間は長くて３０分程度ですが、好評を博してきました。

次いで、緩和ケアのチームラウンド（PCT）にも参加しています。当院には、緩和ケアを専門とする診療科がまだなく、精神科や心療内科も残念ながらありませんので、麻酔科や外科などと協同で PCT を行なっています。週１回ですが、私自身のできる範囲で活動しています。

外来診療では、１０月に、化学療法センターを薬物療法センターに名称変更し、２月には、ベッド数が８床から１０床へ増床されました。満床のために、各レジメンのプロトコール通りのスケジュールで施行できない症例が、月あたり２０件を超えてしまう異常事態を改善したい一心でした。センター専属専任の医師が不在なため、当科がまとめ役を任されています。多岐にわたる関係部署との協力体制が不可欠であることを、常に念頭において業務を行なっています。

最後になりましたが、貴医局より、毎週木曜日に、診療応援をくださっています、大岩先生には、時に、セカンドオピニオン的な役割をも担っていただいており、感謝しています。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願いいたします。

2019.3.

左から
息子その１：潤（Jun）今春小２
息子その２：盤（Ban）今春年少
娘：舞（Mai）今春小４
＠七五三

綿貫第２クリニック　綿貫　樹里

今年度１年を振り返ろうとするのですが、どうにも１月からの新型コロナウィルス感染の問題ばかりが頭に浮かんでしまいます。

2019 年 4 月には、新元号が「令和」と聞いて少々驚いて、身の回りでは診療録や紹介状の日付の部分が変わったのと、生年月日欄の元号が増えたことくらいでした。夏には、台風 19 号による関東・甲信・東北の水害のニュースを聞いて令和になっても災害が減ることもないのだなと思ったりしていました。診療においては 2020 年 1 月まではこれということがなかったのか、年報に何か書けるかしらと思っていました。

2019 年 11 月以降は、例年通りインフルエンザ感染を警戒して当院では入院患者の面会者を家族のみに制限していました。2020 年 1 月下旬頃より新型コロナウィルス感染のニュースが TV で見られるようになり、中国武漢からの旅行者との濃厚接触者の感染のニュースの中、和歌山県でも有田済生会病院の医師の感染が報じられ、びっくりしました。以後は、やはり得体のしれないウイルスに対する不安が大きく、保健所からの通知に敏感になりました。日赤和歌山医療センター感染症科の先生や保健所の方が開いてくださる勉強会に参加させていただき、市中のクリニックの先生方の関心の高さを感じるとともに、新しい疾患を把握し治療を進めるというのはこういうことだと、実感する日々です。

当初は、外来患者の方でも外国人観光客との接触についての不安を口にされるケースもありました。外来診察の中では、今年は例年に比べて風邪をひいたと訴えられる患者さんが少ない印象で、感染対策のマスクや手洗い・消毒の徹底が、こうも効果がみられるのかと感じられます。　当院でも換気・手洗い・消毒薬による清拭の徹底を再周知しました。　市中の高齢者入居施設では、面会・外出が禁止され、施設入所の通院患者さんは家族の代行による受診となりました。当院でも入院患者への面会は全面禁止としました。デイケアについては、高齢者の日常（栄養面・筋力・意欲など）を保つ観点より、継続をしているところです。利用者が高齢ということもあり、感染対策については気を抜けない状態が続いています。

こんな中でも、新型コロナ肺炎以外の呼吸器症状の患者さんやフォローアップ目的で撮影の画像における肺炎には変わりなく出会う訳で、いつも以上に緊張感をもって診察しているところです。当院は数年前に感染症患者対応用スペースを外来の一部に設けており、これまでは活躍することが少なかったのですが、このような事態になってしまうと、やはり無駄でもなかったのだと感じています。

今日の状態では、この新型コロナの感染拡大がどのような方向に進んでゆくのか、いつ終息してくれるのかわからない状況ですが、何十年後かに自分が年をとって、平和にオリンピックが開かれるような時代に、こんな事もあったと話す日が来るのかなと思います。　やはり、早く終息してほしいと願わずにはいられません。

海南医療センターでの血液診療

海南医療センター　内科　弘井 孝幸

2014 年に当科から初の常勤医として栗山先生が海南医療センターに着任されてから 6 年目を迎え、現在海南医療センターは血液内科医常勤 2 名体制で診療を行っています。先輩方が築いてきた血液診療の基盤があり、医大からサポートをいただきながら、これまで大きな問題もなく過ごすことができました。ここでは私が赴任した 2019 年 4 月から 12 月にかけて 9 か月間の海南医療センターでの診療についてご報告させていただきます。

まず外来部門について、当院の血液外来は園木教授、細井先生、弘井、古家先生の 4 名で行っており、主に悪性リンパ腫寛解期の患者や、MDS、ITP、多血症などの患者のフォローを行っています。救急診療も含めると、2017 年度 1516 名、2018 年度 1898 名に対し、本年度は 12 月までで既に 1654 名となっており、年々増加傾向となっています。他院からの紹介は月 10 例程度あり、その約半数が医大からの紹介でした。(図 1) その他は海南市、有田市など近隣の開業医からの紹介となっており、血球異常、リンパ節腫脹を主訴に紹介されます。

入院部門では、入院総数は 248 名、うち血液疾患 142 名(うち 96 名が繰り返し入院)。(図 2) 血液疾患患者の年齢は平均 76 歳とやはり高齢者が多く、疾患別にみると高齢者の悪性リンパ腫化学療法目的が多い結果となりました。(図 3) カルフィルゾミブやニボルマブなどの新規薬剤の導入や、ESHAP などキロサイド大量レジメンも施行するようになり、DA-EPOCH や DeVIC など salvage レジメンの症例数が増加しております。非血液疾患患者数が大幅に増加したことも近年の特徴です。2018 年 4 月に池田院長が就任されてから、病院全体での救急車受け入れ増加を目標とするようになり、肺炎や消化器疾患など common disease を診療する機会が増加しています。

また、月に一回病理医や検査技師を交えて病理カンファレンスを行うようになりました。私個人としては外科の先生方にご協力いただき、皮下埋め込み型ポート埋没術を 9 例執刀し、貴重な経験となりました。

2020 年 7 月から当院で診療経験を積んだ古家先生が那賀病院へ赴任されることになり、ますます和歌山県全体の血液診療は発展していきます。当院も医大をはじめ関連病院との関係をより密にしつつ、地域医療、高齢者医療を中心に血液診療させていただきます。今後とも変わらぬご指導、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

図 1　2019 年度(4～12 月)の外来患者内訳(左: 疾患別、右: 紹介元別)

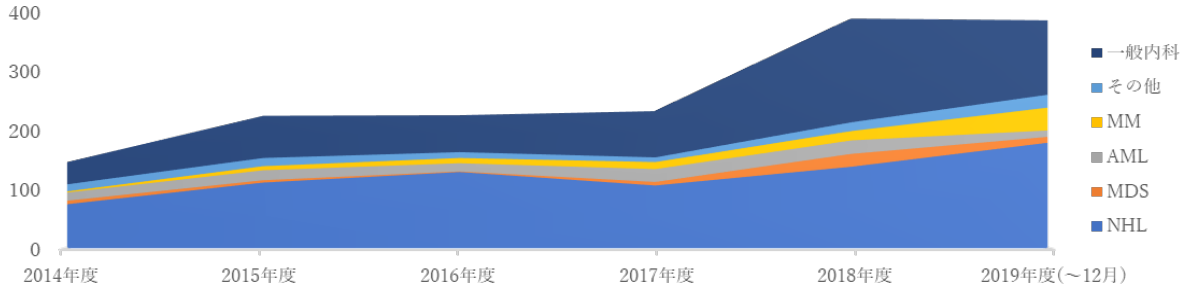


図 2　入院患者数の推移とその内訳